

# 往生者の未来成仏と名称相続

## — 『無量寿経』 と文殊仏国土の思想的連環 —

中 御 門 敬 教

### はじめに

浄土教における代表的經典の一つとして、『無量寿経』が広く知られている。そこには阿弥陀仏の本願や極楽浄土への往生が中心的に説示されている。歴史的にはインド大乘經典に淵源を持ちながらも、特に東アジア仏教圏に大きな影響を及ぼした点が指摘できる。その伝承形態は多岐にわたり、サンスクリット本 (*Sukhāvativyūha*) を基盤として、チベット訳や漢訳など、複数の異本が伝来している。さて今回筆者が注目する箇所は、本経末部 (流通分)<sup>1</sup>に見られる一節である。そこには、極楽浄土に往生した者は最終的に「マンジュ・スヴァラ」(Skt. Mañjusvara, Tib. 'Jam pa'i dbyangs, 漢訳「妙音」) と呼ばれる如来となり、他の国土において成仏することが明記されている。この記述は極めて印象的であるにもかかわらず、従来ほとんど顧みられてこなかった。その理由としては、浄土經典研究の主題が専ら「往生」に置かれ、往生後の成仏に関する問題意識が十分に掘り下げられてこなかった点が挙げられる。そこで本稿ではまず、『無量寿経』サンスクリット本、チベット訳、漢訳の該当箇所を比較し、『阿弥陀経』も含めた従来の研究について、特に藤田宏達氏の見解を紹介する。そのうえで、『文殊師利仏土厳浄経』における文殊菩薩の名称継承思想と関連づけながら、「マンジュ・スヴァラ」現象の宗教的・思想的意義を再検討することを目的とする。

### 1. 『無量寿経』の対応箇所と、『阿弥陀経』の用例 — 藤田宏達氏の見解 —

以下に、上記を承けて「文殊」に関わる『無量寿経』諸本の対応箇所と、同じく代表的な浄土經典である『阿弥陀経』に出る関係箇所を挙げ、それに対する藤田宏達氏の見解を紹介する。

<sup>1</sup> cf. 岡田 [2016] p. 206, 212

サンスクリット本『無量寿経』(cf. 藤田 [2011] p. 79)

sarve te tatrotpādyaṅupūrveṇa **Mañjusvarā** nāma tathāgatā anyeṣu  
lokadhātuṣūpapatsyante.

(彼らすべては、そこ(極楽浄土)に生まれてから、次々に妙音と呼ばれる  
如来たちとして、他の世間界に生まれるであろう。)

『無量寿経』チベット訳 (cf. 『浄全』23, p. 322)

de dag thams cad der skyes nas kyang mthar gyis byang chub sems dpa'i  
spyod yongs su rdzogs par byas te<sup>2</sup> / sangs rgyas kyi zhing gzhan dag tu de  
bzhin gshegs pa 'Jam pa'i dbyangs shes bya bar bla na med pa yang dag par  
rdzogs pa'i byang chub mngon par rdzogs par 'tshang rgya bar 'gyur ro / /

(彼らすべては、そこに生まれてからも、次々に菩薩行を完全に成就し、他  
の諸仏国土において、妙音と呼ばれる如来として、無上正等覚菩提を現等覚  
するであろう。)

唐菩提流支訳『無量寿如来会』(cf. 『大正蔵』11, no. 310-5, p. 101)

皆当往生彼如来土、各於異方次第成仏同名妙音<sup>3</sup>。

(すべて、かの〔阿弥陀〕如来の国土に往生し、各々異なった場所で、次々に妙

<sup>2</sup> Tib. mthar gyis byang chub sems dpa'i spyod yongs su rdzogs par byas te

この文はチベット訳のみにある。菩薩行を成就した後、寿命の修短自在の願(「眷属長寿の願」)に則り(『無量寿経』15願)、寿命をリセットし成仏に向かう。こうしたことが前提となっているため、『無量寿経』誓願文には「漏尽通の成就願」がない(五神通成就の願は冒頭にある)。五神通を用いて救済行を行い、それが完了すると、漏尽通(他者救済段階の実質的終了)が顕在化することになる。

<sup>3</sup> CBETAで「妙音」を検索した結果、『無量寿経』『阿弥陀経』を除いて、以下の典籍に仏名として確認できた。また同時に『阿弥陀経』『華嚴経』の註疏類に出る「妙音仏」を確認したが、音声の美しさを讃えた説明の他、文殊に関する説明は確認できなかった。

- ・唐実叉難陀訳『大方広仏華嚴経』「入法界品」(『大正蔵』10, no. 279, p. 416c)
- ・『仏説仏名経』(『大正蔵』14, no. 441, p. 247b, p. 295c, p. 298c)
- ・失訳『現在賢劫千仏名経』(『大正蔵』14, no. 447, p. 384a)
- ・唐義浄訳『仏説一切功德莊嚴王経』(『大正蔵』21, no. 1374, p. 891c)

音という同じ名前前で成仏する。)

この記述について藤田宏達氏は次のように述べる。

「〈法華経〉では Mañjusvara が Mañjuśrī (文殊師利) の異名として用いられている<sup>4</sup>が (SaddhP. p. 15. l. 10. p. 16. l. 8)、ここでは<sup>5</sup>複数形で用いられており、それとは異なり、委細は不明である。本経では mañjusvara が極楽に生まれた菩薩たちを「大いなる法の太鼓の響きをもって妙なる音を発し」というように、普通名詞 (複数形) として用いている例もある (本訳一四三頁、底本 6311)。<sup>6</sup>」

同氏は、『法華経』ではマンジュ・スヴァラ (Skt. Mañjusvara) は文殊師利 (Skt. Mañjuśrī) の異名だが、ここでは複数形で用いられ異なる趣旨を持つと指摘する。ただし両者を明確に分ける判断は避けている。これが先行研究の到達点である。この問題については、筆者は他に先行研究を確認できなかった。

また『無量寿経』と同じ浄土経典である『阿弥陀経』においても、文殊に関連

<sup>4</sup> 藤田氏が指摘した『法華経』「序品」に出る mañjuśrī と mañjusvara の交代例 (cf. Kern, Nanjio [1977] p. 8)

atha khalu maitreyo bhodhisattvo mahāsattvo mañjuśriyaṃ kumārabhūtam ābhir gāthābhir adhyabhāṣata // (中略)

āścaryaprāpta sma nimitta dṛṣṭvā imam īdṛṣaṃ cābhitam aprameyam /

vadasva mañjusvara etam arthaṃ kautūhalaṃ hy apanaya buddhaputra //50// (中略)

pr̥cche ti māreyu jinasya putra spr̥henti te naramaruyakṣarākṣasāh/

catvār' imā parṣa udikṣamānā mañjusvaraḥ kiṃ nv iha vyākariṣyanti //56/

(中村瑞隆訳 / cf. 中村 [1999] pp. 9-16) そのとき、弥勒菩薩摩訶薩は文殊師利法王子に、これらの詩偈 (偈) をもって話しかけた。(中略) 私たちはこのような量り知れない未曾有の瑞相を見て、奇異の念につつまれている。文殊よ、この [瑞相の] 意味について説明していただきたい。仏子よ、[われわれが] 心にいづく [この] 疑問を、どうか取り除いていただきたい。(五〇) (中略) 弥勒が最勝者の子 [文殊] に尋ねたとき、彼ら人間・天 [神々]・夜叉・羅刹たちは渴望し、[座に連なる] これら四衆たちも「文殊 [師利菩薩] はここで何を説くであろうか」と待ち望んだ。(五六)

<sup>5</sup> 藤田氏が出す「ここでは」を、『無量寿経』サンスクリット本の流通分では」と理解し、「それとは異なり」を「〈法華経〉とは異なり」と理解した。

<sup>6</sup> cf. 藤田 [2015] p. 253

する名前の仏や菩薩が登場するが、その呼び方が諸本において異なり、複雑な状況を生んでいる。以下の二箇所である。

『阿弥陀経』冒頭部分（菩薩衆の列举箇所）

『阿弥陀経』冒頭には、Skt. Mañjuśrī-kumārabhūta<sup>7</sup>、Tib. Jam dpal gzhon nur gyur pa<sup>8</sup>、羅什訳 文殊師利法王子<sup>9</sup>、玄奘訳 妙吉祥菩薩<sup>10</sup>というように、諸本すべてに「文殊菩薩」が登場する。

『阿弥陀経』六方段（東方世界）

『阿弥陀経』の六方段（東方世界）には、諸本に「文殊」を想起させる名称群が確認できる。以下の通りである。

サンスクリット本『阿弥陀経』（cf. 藤田〔2011〕p. 90）

evam eva Śāriputra pūrvasyāṃ diśy Akṣobhyo nāma tathāgato Merudhvajo nāma tathāgato Mahāmerur nāma tathāgato Meruprabhāso nāma tathāgato **Mañjudhvajo** nāma tathāgata evaṃpramukhāḥ Śāriputra pūrvasyāṃ diśi gaṅgānadīvālukopamā buddhā bhagavantaḥ svakasvakāni buddhakṣetrāṇi jihvendriyeṇa saṃcchādayitvā nirveṭhanaṃ kurvaṃti / pratīyatha yūyam idam acintyaḡaṇaparikīrtanaṃ sarvabuddhaparigrahaṃ nāma dharmaparyāyam //

（シャーリプトラよ、まさにそのように、東方において、阿閼と呼ばれる如来、須弥幢と呼ばれる如来、大須弥と呼ばれる如来、須弥光と呼ばれる如来、妙幢と呼ばれる如来がおり、こうした方々をはじめとして、シャーリプトラよ（中略））

<sup>7</sup> cf. 藤田〔2011〕p. 83

<sup>8</sup> cf. 『浄全』23, p. 342

<sup>9</sup> cf. 『大正蔵』12, no. 366, p. 346c

<sup>10</sup> cf. 『大正蔵』12, no. 367, p. 348c

チベット訳『阿弥陀経』（cf.『浄全』23, p. 348）

Śā riī bu ji ltar de bzhin gshegs pa ngas da ltar yongs su brjod pa de bzhin du  
Śā riī bu shar phyogs na bcom ldan 'das de bzhin gshegs pa Mi 'khrugs pa  
zhes bya ba dang / de bzhin gshegs pa lHun po rgyal mtshan zhes bya ba  
dang / de bzhin gshegs pa lHun po zhes bya ba dang / de bzhin gshegs pa  
lHun po chen po zhes bya ba dang / de bzhin gshegs pa lHun po chen po  
snang bya zhes bya ba dang / de bzhin gshegs pa 'Jam sgra<sup>\*11</sup> zhes bya ba  
dang / de bzhin gshegs pa 'Jam dbyangs zhes bya ba dang / de dag la sogs pa  
shar phyogs kyi sangs rgyas bcom ldan 'das gang gā'i klung gi bye ma snyed  
dag rang rang gi sagns rgyas kyi zhing rnam ljangs kyi dbang pos khebs par  
mdzad de / khyed cag yon tan bsam gyis mi khyab pa yongs su brjod pa  
sangs rgyas thams cad kyis yongs su bzung ba'i chos kyi rnam grans 'di la yid  
ches par gyis shig ces gsung ba mdzad do / /

（シャーリプトラよ、（中略）そのように、東方において、阿闍と呼ばれる如  
来と、須弥幢と呼ばれる如来と、須弥と呼ばれる如来と、大須弥と呼ばれる  
如来と、大須弥光と呼ばれる如来と、妙声と呼ばれる如来と、妙音と呼ばれ  
る如来であり、彼ら等々（中略））

鳩摩羅什訳『阿弥陀経』（cf.『大正蔵』12, no. 366, p. 347）

舍利弗、如我今者讚歎阿弥陀仏不可思議功德。東方亦有阿闍鞞仏、須弥相仏、大  
須弥仏、須弥光仏、妙音仏、如是等恒河沙数諸仏、各於其国出広長舌相遍覆三千  
大千世界。説誠実言、汝等衆生当信是称讚不可思議功德一切諸仏所護念経。

（シャーリプトラよ、（中略）東方にまた阿闍鞞仏、須弥相仏、大須弥仏、須  
弥光仏、妙音仏がおり、こうした（中略））

玄奘訳『称讚浄土仏摂受経』（『大正蔵』12, no. 367, p. 350）

又舍利子、如我今者称揚讚歎無量寿仏無量無辺不可思議仏土功德。如是東方亦有  
現在不動如来、山幢如来、大山如来、山光如来、妙幢如来、如是等仏如殑伽沙住

<sup>11</sup> sgrag U, L, sgra Ph, W, S, T, J, P, C, N, D, Ur, H cf. 新作〔2010〕

在東方、自仏土各各示現広長舌相遍覆三千大千世界周匝圍。説誠諦言、汝等有情皆信心受如是称讚不可思議仏土功德一切諸仏摂受法門。

(またシャーリプトラよ、(中略) このように東方にまた不動如来、山幢如来、大山如来、山光如来、妙幢如来が現におられ、これらの (中略))

ここに挙げた文殊を想起させる名称群 (ゴチック箇所) に対して、藤田氏は先行研究を整理し、以下のように述べる。

cf. 藤田 [1975] pp. 240-241

「マンジュ・ドヴァジャ - 原語は Mañjudhvaja で、玄奘訳の「妙幢」が対応する。しかし、チベット訳には、hjam sgra (妙声) とあり、さらにその次に hjam dbyaṅs (妙音) をあげている。中村元博士は前者の hjam sgra の原語として Mañjudhvani を推定され、後者の hjam dbyaṅs の原語としては Mañjuḥṣa の推定 (池田澄達『初等西蔵語読本』山喜房仏書林、昭和七年、辞書一四頁) を支持され、かつ羅什訳の「妙音」を当てておられる (『阿弥陀経チベット訳について』『岩井博士古稀記念・典籍論集』所収、昭和三十八年、四二七頁、岩波文庫『浄土三部経』下、一三九頁)」

cf. 藤田 [2015] pp. 265

「マンジュ・ドヴァジャ - 原語は Mañjudhvaja で、チベット訳と羅什訳には欠き、玄奘訳の「妙音」が対応する。」

池田澄達氏および中村元氏は、チベット訳『無量寿経』に見える 'Jam dbyaṅs の原語を Skt. Mañjuḥṣa (文殊) に比定している。両氏の見解に従えば、Skt. Mañjuḥṣa が文殊の代表的標識であることから、六方段東方世界における文殊の存在を看過することはできないであろう。これに対し藤田氏は、1975年の著作ではかかる説を詳細に紹介しているものの、2015年の改訂版ではその紹介を大幅に省略している。これは同書2015年版 p. 253における基調と軌を一にするものであり、氏は『無量寿経』に「文殊」が言及されている点、およびその背景について、積極的な判断を控えていると理解される。さらに、チベット訳および漢訳の『阿弥陀経』には、訳語の理解いかんによっては「文殊仏」と同一視される記

述が認められる。しかし、文殊に関わる原語と訳語の対応関係は一義的に定めがたく、問題を一層複雑にしている。

## 2. 『文殊師利仏土厳浄経』との関連

『無量寿経』および『阿弥陀経』においては、文殊菩薩の位置付けを直接に判断することは困難である。これら経典にはインド撰述の注釈も伝わっておらず、文殊と浄土思想との関係を考察するにあたっては、他の経典に依拠せざるを得ない。そこで注目すべき資料として、『大宝積経』に収められる『文殊師利仏土厳浄経』が挙げられる。この経典は『無量寿経』『阿弥陀経』と同様に、インド起源の浄土経典である。

『文殊師利仏土厳浄経』には、文殊の前世「普覆王」(Skt. Ambararāja, Tib. rGyal po Nam mkha'), 成仏後の「普見」(Tib. Kun tu zigs pa)といった名称の変遷が説かれるとともに<sup>12</sup>、「文殊仏国土」(Skt. Mañjuśrībuddhakṣetra, Tib. 'Jam dpal gyi sangs rgyas kyi zhing)の存在が言及される<sup>13</sup>。これは後代の密教において文殊菩薩が文殊仏と等値される思想の源流を示すものと考えられる(後述)<sup>14</sup>。また、西晋竺法護による『文殊師利仏土厳浄経』の訳題そのものからも、三～四世紀初頭の段階にすでにかかる発想が存在していたことが窺われる。大乘仏教における文殊の極めて高い位置付けが確認される。

ここで注目すべきは、同一経典内に二通りの図式が併存する点である。

<sup>12</sup> cf. 中御門〔2014a〕〔2014b〕

<sup>13</sup> cf. *Mahāvīyutpatti* 1381 (56) (cf. 榎〔1981〕p. 106) Mañjuśrī-buddha-kṣetra-guṇa-vyūhaḥ〔藏〕Hjam-dpal-gyi saṅs-rgyas-kyi shin-gi yon-tan bkod-pa〔漢〕妙吉祥仏土厳浄功德経、妙吉祥仏土功德厳経〔和〕文殊師利授記会、文殊師利所説不思議仏境界経、文殊師利仏土厳浄経 cf. 唐実又難陀訳『文殊師利授記会』(『大正蔵』11, no. 310-15) 西晋竺法護訳『文殊師利仏土厳浄経』(『大正蔵』11, no. 318)、唐不空訳『大聖文殊師利菩薩仏利功德莊嚴経』(『大正蔵』11, no. 319)

<sup>14</sup> cf. 中御門〔2024〕p. 405

『大日経』が説く大悲胎藏生マンドラにおいて、文殊は毘盧遮那・釈迦に次ぐ、菩薩の筆頭として重視される(cf. 酒井〔1987〕p. 5)。また瑜伽タントラから無上ユガタントラへの過渡期にある『ナーマサンギーティ』では、文殊は本初仏(Skt. ādhibuddha)の地位を得る。そして『秘密衆会』ジュニャーダパーダ流のマンドラでは中尊・文殊金剛となる(安元剛氏による御教示を含む)。詳細は本稿注23を参照。

①普覆王→文殊菩薩→普見仏（名称の変化）

②文殊菩薩→文殊仏（名称の継承）<sup>15</sup>

通常想定されるのは①であるが、とりわけ注目すべきは②である。すなわち「文殊菩薩が文殊仏へと転じる」という、尊格の属性の継承を名称の相続で含意させる構図こそが、『無量寿経』の往生者が「マンジュ・スヴァラ」となる現象の背景

<sup>15</sup> 過去から現在にわたり同一名称の仏が出現すること、もしくは成仏の際に菩薩の名称が相続される点については、中御門〔2024〕pp. 593-607を参照のこと。

①釈迦牟尼（過去）→釈迦牟尼（現在）

cf. 『俱舍論』 Pradhan〔1975〕p. 266ff、五百阿羅漢等造、唐玄奘訳『阿毘達磨大毘婆沙論』（cf.『大正藏』27, no. 1545, pp. 886c27ff.）

②阿閼菩薩（過去）→阿閼仏

cf. 『阿閼仏国土経』、『悲華経』、『維摩経』

③弥勒菩薩（過去）→弥勒仏（弥勒）

cf. 玄奘訳『大毘婆沙論』卷百七十八

④日月灯明仏→日月灯明仏

cf. 『法華経』序品

同一名称の仏 Skt. kula（家系）と gotra（姓）の継承 授記の形態。

cf. Kern, Nanjio〔1977〕p. 18. 2-9 日月灯明如来の後継はすべて日月灯明如来になる。

tasya khalu punaḥ kulaputrāś candrasūryapradīpasya tathāgatasyārhatāḥ  
samyaksaṃbuddhasya pareṇa parataraṃ candrasūryapradīpa eva nāmnā tathāgato 'rhan  
samyaksaṃbuddho loka udapādi | iti hi ajītaiteṇa paraṃparodāhāreṇa  
candrasūryapradīpanāmākānāṃ tathāgatānāṃ arhatāṃ samyaksaṃbuddhānāṃ  
ekanāmadheyānāṃ ekakulagotrāṇāṃ yadidaṃ bharadvājasagotrāṇāṃ  
viṃśatitathāgatasahasrāṇy abhūvan | tatra ajīta teṣāṃ viṃśatitathāgatasahasrāṇāṃ  
pūrvakaṃ tathāgatam upādāya yāvat paścimakas tathāgataḥ, so 'pi  
candrasūryapradīpanāmadheya eva tathāgato 'bhūd arhan samyaksaṃbuddho  
vidyācaraṇasaṃpannaḥ sugato lokavid anuttaraḥ puruṣadamyasārathiḥ śāstā devānāṃ ca  
manuṣyānāṃ ca buddho bhagavān |

⑤普賢菩薩大士→無数の普賢菩薩大士

華嚴的文脈では、華嚴世界の個と全体との遍満関係や相即関係。

『無量寿経』に入った華嚴的世界観の影響ともいえるか。

cf. 『華嚴経』（『六十華嚴』）「普賢菩薩行品」、『華嚴経』（『六十華嚴』）「宝王如来声性起品」cf. 拙著〔2024〕pp. 151-155

⑥ダライラマ…→ダライラマ…→ダライラマ（観音の変化身）

パンチェンラマ…→パンチェンラマ…→パンチェンラマ（阿弥陀の変化身）

にあると推定できる。換言すれば、極楽往生者は文殊菩薩と同等の資質を具備することが保証されているのである。実際、『文殊師利仏土厳浄経』には、文殊が輪廻を厭わず菩薩行を永遠に持続するという「大波濤誓願 (Tib. smon lam rlabs chen)」(チベット訳にのみ出る)<sup>16</sup>が説かれる。この発想は、『無量寿経』における「一生補処願」を支える思想的基盤とも理解しうる。すなわち、極楽往生者は例外的に普賢行(文殊菩薩による永続的な菩薩行)の実践者を除き、悉く一生補処の存在とされるが、その例外規定が成立する背後には往生者が阿弥陀仏の本願力によって「文殊に等しい者」になることが含意されていると考えられるのである。いわば流通分に出る「マンジュ・スヴァラ」現象は、「一生補処願」に出る例外規定の願成就文と想定されうる。この点を踏まえるならば、極楽浄土とは智慧と慈悲とが円融した仏国土として位置づけされると同時に、そこに往生する者は文殊の徳性を体現する存在でもあるという理解が妥当であろう<sup>17</sup>。

### 3. 文殊菩薩の全体像：名称・性格・密教的展開および語義解釈

ここでは、「文殊」の全体像について概観しておく<sup>18</sup>。文殊は、代表的な大乘仏

<sup>16</sup> 以下、文殊の前世である普覆王が世尊へ宣説すると、発せられる諸天の声。

「(P. Wi317a) (D. Ga279a) 一切衆生を益するために、大波濤の〔ような〕誓願 (Tib. smon lam rlabs chen) を立てなさい。菩提心を発して、諸々の世界の利益 (Tib. don) をなしなさい。」

以下、これを承けた普覆王の誓願。

「(P. Wi317a) (D. Ga279a) 輪廻の終わりは無いが、始まりの終わりがあるかぎり、そのかぎり衆生を益するために無量の行を行いましょう (v. 15)。 (中略)

私は菩提を速すぎる仕方で証覚することを信解し、喜ぶことはありません。後の辺際(未来)に至るまでも、一人の衆生のために行いましょう (v. 20)。

無量で不可思議な仏国土を浄化しましょう。十方すべてにおいて、私は〔自分の〕名前を聞かせましょう (v. 21) (中略)

私は自己に対して授記しました。仏になることは疑いありません (v.22)。 (中略)」

詳細は、中御門〔2024〕 pp. 105-108 を参照のこと。ちなみに『華嚴経』「入法界品」の要約である『普賢行願讃』では、上記 v. 15 をもって普賢行の根拠とする。これらの文脈から文殊菩薩の誓願行が、華嚴の文脈において「普く賢れた誓願行 = 普賢行」と読み替えられたことが分かる。

<sup>17</sup> 一般的に、智慧は文殊、慈悲は普賢に象徴される。

<sup>18</sup> cf. 中御門〔2024〕 pp. 515-516

教の菩薩であり、サンスクリット語では Mañjuśrī, Mañjuḥoṣa, Mañjuśvara など複数の名称で知られる。チベット語では 'Jam pa'i dbyangs、'Jam dbyangs、'Jam dpal などの訳語が対応し、特に Mañjuśrī に対しては 'Jam dpal があてられる傾向が強い<sup>19</sup>。

漢訳仏典では、文殊師利、曼殊室利、濡首などの音写が見られ、意識しては妙吉祥、妙音、妙徳などの語も用いられる。また、文殊師利法王子 (Skt. Mañjuśrī-kumārabhūta) とも称されることがあるが、この Skt. kumārabhūta は、「法王子 (王の後継者)」ではなく「童真」、すなわち出家して禁欲生活を営む菩薩である<sup>20</sup>。

階位としては、『無量寿経』と同じ大乘經典である『華嚴経』の十住説では「第八童真位」に位置づけられ、不退転を得た後に出家した段階とされる。また少年の姿 (永遠の青年) で表されることとも関連する。

ここで初期から中期の大乘經典における、文殊の性格を確認しておこう。

1. 智慧と慈悲：智慧を本質としつつ、慈悲の実践を兼ね備える。
2. 諸仏の父母：『首楞嚴三昧経』や支婁迦讖訳『阿闍世王経』<sup>21</sup>などでは、無始より輪廻の中で諸菩薩の父母として衆生を教化する姿が強調される。
3. 永遠の菩薩：平川彰説によれば、文殊は成仏間近の「一生補処」の菩薩ではなく、無仏の時代を回避して衆生を救うため、あえて成仏せず永遠に菩薩の位にとどまる存在とされる<sup>22</sup>。

その存在については、大乘仏教興期の実在人物とする説も見られるが、詳細は明らかでない。文殊を主題とする仏典は多く、近年では「文殊部」という新たな分類さえ生まれている。また近代仏教学においては、平川彰・赤沼智善氏らによって Skt. Mañju の語義が検討されてきたが、その定義は必ずしも明確ではなかつ

<sup>19</sup> cf. *Mahāvīyūtpatti* 1381 (56) Skt. Mañjuśrī / Tib. 'Jam dpal / 妙吉祥 / 文殊師利)

<sup>20</sup> 光川 [2024] pp. 10-11 には、「シュリー (Skt. śrī)」の解釈を行った赤沼智善説が紹介される。平川 [1970] [1995] には、「クマーラプータ (Skt. kumārabhūta)」の解釈は出る。しかし、筆者が確認した限り、そこに「文殊 (Skt. Mañjuśrī, -ghoṣa, -svara)」の定義は明言されていない。

<sup>21</sup> cf. 支婁迦讖訳『阿闍世王経』(『大正蔵』15, no. 626, 393c-394b)、同「文殊師利者是菩薩之父母」(p. 394b19)

<sup>22</sup> cf. 平川 [1970] [1995]

た。すなわち、従来の研究では文献的根拠に基づく精密な語義解釈が十分に提示されていない。一方、チベット大蔵経に収められたタントラおよびその注釈書においては、文殊が単なる菩薩名にとどまらず、智慧の本質や覚知の働きを象徴する存在として再定義され、その名称自体が教義的に再解釈されている点が注目される。そこでは文殊菩薩の性格は深化向上して、最終的には菩薩そのままに「仏」としての性質を獲得する者として登場する。スダン・シャキャ氏の俯瞰的研究によれば、文殊の解釈は「凡夫→十地の主（菩薩）→本初仏（Skt. Ādibuddha）」へと変化する。具体的には8世紀後半成立の『ナーマサンギーティ』では、文殊菩薩はすでに仏果を得た者、あるいは一切の仏・菩薩を生み出す根源的な「本初仏」として頂点に位置づけられるという<sup>23</sup>。

#### 4. 文殊、普賢行、『無量寿経』『一所補処願』<sup>24</sup>

文殊菩薩の智慧と慈悲に根ざした誓願を、『華嚴経』『入法界品』では「普賢行」と呼び、その体现者が普賢菩薩となっていく（普通名詞と固有名詞の普賢菩薩）。ちなみにこの読み替えは、そのまま固有名詞である普賢菩薩の登場にトレースで

<sup>23</sup> cf. スダン〔2009〕pp.99-100、同〔2013〕

『ナーマサンギーティ』（8世紀後半成立）では、文殊を「本初仏（Skt. ādibuddha）」と解釈する。「本初仏」とは文字通り「最初に悟った者」「第一の仏」を意味し、生起や因縁を超えた根源的仏の存在を示す。文献上では『大乘莊嚴経論』が初出とされる。『ナーマサンギーティ』本文では、文殊は「自然生（Skt. svayaṃbhū）」「無始無終（Skt. anādinidhana）」「最勝で第一（Skt. paramādya）」などの表現によって、本初仏的性格を帯びた描写である。人格化の進んだ法身とも考えられる。また『ナーマサンギーティ』の注釈者であるマンジュシュリーキールティ（Mañjuśrīkīrti）は、『同釈』において、文殊を「一切仏達の生者」と解釈し、秘密真言、般若波羅蜜、菩薩行という三つの立場から、あらゆる仏・菩薩を生み出す根源的原理であると説明する。『首楞嚴三昧経』や『阿闍世王経』の伝承を踏まえたものと思われる。以上、すなわち本初仏としての文殊とは、他因によらず自性として法界に立ち、仏の覚りそのものを生起させる究極的智慧の象徴とされる。

cf. スダン〔2013〕p. 56

「『大日経』のような行タントラの教義において、文殊はすでに悟った者として解釈されている。（中略）『ナーマサンギーティ』は『幻化網タントラ』という大規模な經典から抄出されたものであり、そこに文殊の異名として「本初仏」という言葉がはじめて登場する。」

<sup>24</sup> cf. 中御門〔2024〕pp. 567-612

きる。またそこでは、普賢菩薩は衆生救済が完了するまで輪廻を厭わない究極的な利他行の実践者と位置づけられる。『無量寿経』は「一生補処願」で「一生補処（あと一生涯過ごせば成仏する境地）」を理想としながらも、「普賢行（文殊菩薩の普く賢れた菩薩行、輪廻を厭わない救済行）」を但し書きとして扱うことで、この二つの対極的な概念を調和させた（ちなみに「入法界品」では一生補処はあまり説かれぬ）。二つの概念とは、往生後に速やかに成仏を目指す立場、そして救済行を行う立場である。そして、そのうちの後者、極楽往生を単なる個人的な解脱ではなく、衆生救済のための新たな出発点と捉える「還相廻向／普賢行の実践」の思想は、浄土教の重要な展開として位置づけられたことが分かる。これは一生補処を越えた、不住涅槃、無住处涅槃といった菩薩の最高理想を体現するものであり、文殊が象徴する無限の利他行と合致する。冒頭に提示した、「往生者がマンジュ・スヴァラになる」という記述は、彼らが普く賢れた永続的菩薩行（文殊の誓願行）を完成することの象徴的表現ではないかと、仮説する。ちなみに後世のタントラ文献である、スムリティジュナーナキールティ（*Smṛtijñānakīrti*）による『ナーマサンギーティ註』（Skt. *Mañjuśrīnāmasaṃgītilakṣabhāṣya*、東北 no. 2538、大谷 no. 3361）では、無上瑜伽タントラの立場では、法身を本性とするものを文殊とし、その別名は普賢とされている<sup>25</sup>。

## 5. 『無量寿経』諸本による流通分の対照

『無量寿経』流通分に見られる経典果報の叙述に注目する。同箇所においては、聞法後の聴衆が獲得する修道階位が得益として提示されている。この記述の流れからすると、極楽浄土に往生した者が最終的に「マンジュ・スヴァラ」（Skt. *Mañjuśvara*, Tib. 'Jam pa'i dbyangs, 漢訳「妙音」）と称される如来となり、他の国土において成仏することも、『無量寿経』の聞法者に付与される修道上の位階であり、得益の一種であることと理解される。

以下に流通分における当該箇所を中心として、『無量寿経』諸本の比較検討を行い、いわゆる文殊成仏説の再検証を試みる。

<sup>25</sup> cf. スダン [2013] pp. 54-55

### 5-1. 漢訳諸本（『無量寿莊嚴経』は省略、数字は筆者付け）

#### ・『大阿弥陀経』（『大正蔵』12, no. 362, p. 317c）

仏説是経時。即万二千億諸天人人民。①皆得天眼徹視。悉一心皆為菩薩道。即二百億諸天人人民。皆得②阿那含道。即八百沙門。皆得③阿羅漢道。即四十億菩薩。皆得④阿惟越致。

⇒①天眼通？（天眼徹視）、②阿那含道、③阿羅漢道、④不退転

#### ・『平等覚経』（『大正蔵』12, no. 361, p. 299c）

仏説是経時。則万二千億諸天人人民。皆得①天眼徹視。悉一心皆為菩薩道。則二百二十億諸天人人民。皆得②阿那含道。則八百沙門。皆得③阿羅漢道。則四十億菩薩。皆得④阿惟越致。

⇒①天眼通？（天眼徹視）、②阿那含道、③阿羅漢道、④不退転

#### ・『無量寿経』（『大正蔵』12, no. 360, p. 279a）

爾時世尊説此経法無量衆生皆發無上正覚之心。万二千那由他人得①清浄法眼。二十二億諸天人人民得②阿那含。八十万③比丘漏尽意解。四十億菩薩得④不退転。以弘誓功德而自莊嚴。於将来世当成正覚。

⇒①清浄法眼、②阿那含道、③阿羅漢道（菩薩道の方は五神通だけ、最後の漏尽通は残す）、④不退転

#### ・『無量寿如来会』（『大正蔵』11, no. 310-11, p. 101c）

爾時世尊説是経已。天人世間有万二千那由他億衆生。遠塵離垢得①法眼浄。二十億衆生。得②阿那含果。六千八百③比丘。諸漏已尽心得解脱。四十億菩薩。於無上菩提住④不退転。被大甲冑当成正覚。有二十五億衆生得⑤不退忍。有四万億那由他百千衆生。於無上菩提未曾發意。今始初發種諸善根。願生極樂世界見阿弥陀仏。⑥皆當往生彼如来土。⑦各於異方次第成仏同名妙音。有八万億那由他衆生。得授記法忍成無上菩提。彼無量寿仏昔行菩薩道時成熟有情。悉皆当生極樂世界。憶念儔昔所發思願皆得成満

⇒①清浄法眼、②阿那含果、③阿羅漢果、④不退転、⑤不退忍（三忍）、⑥極樂往

## 生（一生補処）、⑦普賢行（文殊菩薩の普く賢れた永続的菩薩行）

### 5-2. サンスクリット本<sup>26</sup>

以下に分量の関係から要約の形で出し（cf. 藤田〔2011〕p. 79. 1-15）、注記には対応するサンスクリット本原文、並びに藤田〔2025〕に出る解説を掲載する。

- ①十二ナユタ・コーティの衆生たちは無塵離垢の清浄な法眼が得られる<sup>27</sup>。
- ②二十四コーティの者たちは不還果になる<sup>28</sup>。
- ③八百の出家者たちは執着が無くなり、諸漏から心が自由になる<sup>29</sup>。
- ④二十五コーティの菩薩たちは無生法忍が得られる<sup>30</sup>。
- ⑤四十の百千コーティ・ナユタの神々と人々は極楽往生を欲する<sup>31</sup>。
- ⑥彼らすべては、極楽往生後、成仏する際に「マンジュスヴァラ（Skt. Mañjusvara）」と命名される<sup>32</sup>。

<sup>26</sup> チベット訳はサンスクリット本と内容が類似するため、ここではサンスクリット本を代表とする。

<sup>27</sup> cf. 藤田〔2011〕p. 79 dvādaśānām sattvanayutakoṭīnām virajo vīgatamaḷam dharmeṣu dharmacakṣur viśuddham

cf. 藤田〔2015〕p. 252 注

「もとは原始経典における「塵のない垢を離れた法眼」（virajam vītamalaṃ dhammacakkam）という文に由来する（*Vin.* I, p. 11; *DN.* I, p. 110; *MN.* I, p. 380; *SN.* IV, p. 49; *AN.* IV, p. 186, etc.）」

<sup>28</sup> cf. 藤田〔2011〕p. 79 caturviṃśatyā koṭībhīr anāgāmiphalaṃ prāptam /

<sup>29</sup> cf. 藤田〔2011〕p. 79 aṣṭānām bhikṣuśātānām anupādāyāśravebhyaś cittāni vimuktāni /

cf. 藤田〔2015〕p. 252 注

「これは、原始仏教における解脱をあらわす古い定型句（anupādāya āsavehi cittāni vimuccimṣu）を受けたもので（*Vin.* I, p. 14; *DN.* II, p. 35; *MN.* III, p. 20; *SN.* II, p. 187; *AN.* I, p. 240; *Sn.* p. 149, etc.）、サンスクリット仏典では、大小二乗を通じてしばしば用いられている（*Divy.* p. 655, l. 4; *Mv.* I, p. 329, l. 19; *AṣṭP.* p. 280, l. 14f; *SaddhhP.* p. 179, l. 17; *Vimal.* p. 14, l. 5; *Rāṣṭ.* p. 59, l. 19; *Kāṣy.* § 138, l. 2, etc.）。

<sup>30</sup> cf. 藤田〔2011〕p. 79 pañcaviṃśatyā bodhisattvakoṭībhīr

anutpattikadharmakṣāntipratilabdhaḥ /

<sup>31</sup> cf. 藤田〔2011〕p. 79 devamānuṣīkāyāś ca prajāyāś catvāriṃśatkoṭīnayaṭasatasahasrāṣṇām anutpannapūrvāṇy anuttarāyāṃ samyaksaṃbodhau cittāny utpannāni sukhāvatyupapattaye ca kuśalamūlāny avaropitāni bhagavato mitābhasya darśanakāmatayā /

⑦(総論)自身が選択した仏国土(極楽)に生まれて、生前に立てた誓願行を成就する<sup>33</sup>。

⇒①清浄法眼、②不還果、③阿羅漢果、④無生法忍、⑤極楽往生(一生補処/經典主題<sup>34</sup>)、⑥普賢行(不住涅槃/無住処涅槃)、⑦総論

(※「⑤極楽往生」には、①四種菩薩の階位の受容(一生補処)、②流通分での付嘱事項の二義が読み取れる。)

### 5-3. 『無量寿経』の修行階位から見た經典主題

先ず、『無量寿経』の修行階位を扱った先行研究として、香川〔1993〕pp. 200-203を参照する。同研究は、『無量寿経』に見られる修行階位が、『般若経』系

<sup>32</sup> 極楽に生まれた者は、同じ文殊族になる。

cf. 藤田〔2011〕p. 79 *sarve te tatrotpadyānupūrveṇa mañjusvarā nāma tathāgatā anyeṣu lokadhātuṣūpapatsyante /*

Skt. *sarve te* ⇒①~⑤/⑤という二通りの理解がある。「彼ら」ではなく「彼らすべて」なので①~⑤を指すか。

<sup>33</sup> cf. 藤田〔2011〕p. 79 *aśītīś ca nayutakoṭyo dīpaṃkareṇa tathāgatena labdhakṣāntikā avaiartyā anuttarāyāḥ samyaksambodher amitāyusaiva tathāgatena paripācitāḥ pūrvabodhisattvacaryāṃ caratā tāś ca sukhāvatyāṃ lokadhātāv upapadya pūrvaprapīdhānacaryāḥ paripūrayiṣyanti //*

諸氏によって理解が異なる。藤田氏は批判的校訂を行い、菩薩行の主体を無量寿仏とする。岩波文庫訳 (cf. 中村、早島、紀野〔2006〕p. 137) : かれらは前世に求道者としての行いを実践していたから、無量寿如来によって成熟せしめられ、〈幸あるところ〉という世界に生まれて、昔立てた誓願と諸々の行ないを完成するであろう。

藤田訳 (cf. 藤田〔2015〕p. 170) : まさしくアマターユス如来が前世で菩薩の行を実践していたときに成熟させられて、かれらは極楽世界に生まれ、前世の誓願と行とを完成するであろう。

大乗仏典訳 (cf. 山口、櫻部、森〔1976〕p. 90) : 前(の世)において菩薩の行を実践していたアマターユス如来によって成熟させられる。彼らは、やがて安楽世界に生まれて、かつて(立てた)誓願と行とを完成するであろう。

※足利本 : -caryāś carantās、マックス・ミュラー刊本 : -caryāṃ carantas、大谷光端刊本 : -caryāṃ carantaḥ、藤田校訂 : -caryāṃ caratā (sg. Ins)

往生者は前世に誓願行を行う点から考えて、⑦の理解は岩波文庫訳が穏当であろう。cf. 中御門〔2017〕

<sup>34</sup> cf. 岡田〔2016〕經典の説く付嘱・流通について : 『法華経』⇒一仏乗の教えを衆生に付嘱、『般若経』⇒般若波羅蜜を阿難に付嘱、『維摩経』⇒經典供養と、弥勒に対する經典弘通の委嘱とする。

統のものと類似すると指摘する。

「四向四果の声聞道が否定されずに菩薩道の中に組み込まれ、その上に阿惟越致菩薩（＝不退転）を位置づける仏道体系が初期の〈般若経〉に見られたが、〈無量寿経〉も初期の段階では、これと同じ仏道体系を有していたことが指摘できる。」

一方、初期『般若経』の修行階位を検討した鈴木〔2022〕 pp. 46-50 は、大品『般若経』において不退転より上位に位置する一生補処がより意識されるようになること、また「発心菩薩→行六波羅蜜菩薩→不退転→一生補処」という四種菩薩はむしろ例外的である点を指摘している。

このように先行研究で多様な議論が展開されているが、本稿が注目するのは、流通分において初期仏典以来の定型表現、四向四果、さらに四種菩薩の階位という、互いに異なるカテゴリーの修道階位が複合的に提示される点である<sup>35</sup>。加えて『無量寿経』が「不退転→一生補処→成仏」という階位の場合を極楽浄土に措定している点である。

また、流通分において衆生の階位や付嘱事項が説示される点から、サンスクリット本・チベット訳・『無量寿如来会』のいずれも、一生補処としての極楽への往生を経典の主要主題として勧奨していることが確認できる。

そして以上を踏まえると、上記の後期『無量寿経』諸本においては、往生者が文殊(Skt. Mañjuśvara)として成仏するという構想が、流通分に見られる相対的な修道論の文脈の中で、個別的な成仏相として強調されている点を確認できる。

**小結** - Skt. Mañjuśvara が文殊に関係する名前であった場合 -

・『無量寿経』流通分での「マンジュスヴァラ成仏」とは象徴的な名前の付与である。

・上記、往生者が普賢行（文殊菩薩による永続的な菩薩行）を成就することで、将来、文殊のような理想的如来になることを表現している。

<sup>35</sup> 大乘仏教の大乘的な修行階位には『般若経』に出る「共の十地」がある。これと関係する『阿含経』『毘尼母経』『舍利弗阿毘曇論』などを資料とした「共の十地の発展対照表」が平川〔1992〕 p. 525 に出る。

・成仏後の名前が統一される背景には、『法華経』にあるように、「名と徳の一致」の思想がある（往生後に普賢行を行う菩薩（一生補処願）は、文殊のようなので、「文殊」という同一の名前になる）。

・流通分に衆生の階位、付嘱事項が説かれる点から見て、サンスクリット本、チベット訳、『無量寿如来会』は、一生補処の極楽への往生を經典主題として勧める。

・往生者が「マンジュスヴァラ」を名乗る謎～象徴主義的な解釈の提示～については、名前の問題ではなく、どのような成仏を遂げるか、その質を問う問題、すなわち文殊は、智慧の象徴ではなく、永続的な利他行を行う理想的な到達点とされる。往生者も、大乘仏教の救済の視点から、その域に至る存在として描かれていると考える。

・サンスクリット本『無量寿経』に、いわゆる文殊仏が登場する背景としては、サンスクリット本は『無量寿経』成立史の上では、後期『無量寿経』に位置するので、そこに文殊に関する密教説が混入した可能性もある。

### 【参考資料①『普賢行願讚積友釈』に出る「文殊」の定義】

『十地経』と共に、『華嚴経』を代表する經典に『入法界品 (Skt. *Gaṇḍavyūha*)』が存在する。そしてその要約（／略華嚴）として知られる『普賢行願讚 (Skt. *Bhadracarī*)』の釈には、略釈系統と広釈系統が存在する<sup>36</sup>。そのうちの広釈系統に、釈友 (Skt. *Śākyamitra*, Tib. *Shākya'i bshes gnyen*, 8c. ca.) による注釈が存在する。著者は、瑜伽タントラの「三大学匠」（ブツダグヒヤ／*Buddhaguhya*, 8c. ca.、アーナンダガルバ／*Ānandagarbha*, 8c. ca.、本人）<sup>37</sup>の一人として、そして無上瑜伽タントラの「四大弟子」（アールヤデーヴァ／*Āryadeva*、ナーガボーディ／*Nāgabodhi*、チャンドラキールティ／*Candrakīrti*、本人）の一人として、極めて有名である。

その釈友 (8c. ca.) は、以下のように『普賢行願讚積友釈』に文殊の名前の定義を挙げる。ただしその典拠を筆者は確認できなかった。彼が密教家であること

<sup>36</sup> cf. 中御門 [2024] pp. 191ff, 402ff

<sup>37</sup> cf. 頼富 [1990] p. 178 プトン著『瑜伽タントラの海に入る船 (*rNal 'byor rgyud kyi rgya mtshor 'jug pa'i gru gings*)』に出る。

から、それは何かしらの密教典籍から着想を得たものかもしれない。

cf. 中御門〔2024〕 pp. 361-462, pp. 515-516

(v. 44) 釈友釈<sup>38</sup> (D. Nyi. 226b3ff.) (P. Nyi. 258b6ff.) : (中略) 一切相において美しく、自性により相続が清浄であるから「善 (dge ba)」である。最高に意を奪い、最高に美しく、すべてにおいて善である (kun du dge ba 厳浄)、その普く賢れた行 (kun du bzang po'i spyod pa) によって、この〔文殊菩薩の〕お体は柔軟 ('jam) であり、お顔は愛らしく (mdangs sdug pa)、無上であるから、あらゆる仏が、名前が「柔和で吉祥である ('Jam dpal)」という者として示した。(中略)

#### 【参考資料②チベット仏教のゲルク派が説く「文殊」の定義】

ツルティム、藤仲〔2012〕(cf. p. 119 注 0-8) に、ゲルク派の学僧モンラムペルワ (sMon lam dpal ba. 1414-1491. 第八代のガンデン座主) の説が紹介されている (cf. *rNam 'grel mtha' dpyod chen mo*, 1988, pp. 2-3)。以下のとおりである。

〔(ツルティム、藤仲訳)「聖者マンジュシュリー童子〔となったもの〕に帰命する」とこれが出ている。尊者マンジュシュリー - 有法。それ (有法) について、「聖者マンジュシュリー (妙吉祥)」と呼ぶ理由がある。〔なぜなら、〕異生 (凡夫) の地より勝れている (聖である)、または罪悪、不善の地より勝れている (聖

<sup>38</sup> *'Phags pa bzang po spyod pa'i smon lam gyi rgyal po'i rgya cher 'grel pa*

D. no. 4013, P. no. 5514

(D. Nyi. 226b3ff.) (P. Nyi. 258b6ff.) de ltar byang chub sems dpa' sems dpa' chen po Kun du (P. tu) bzang po'i spyod pa dang mthun pa dang / de'i bsngo ba dang mthun pa bstan nas / byang chub sems dpa' chen po 'phags pa 'Jam dpal zab cing rgya che ba'i thugs dang ldan pa'i spyod yul yang yongs su rdzogs par bya'o zhes bstan pa'i phyir / kun nas dge ba bzang po spyod pa'i phyir / zehs bya ba la sogs pa gsungs so // **rnam pa thams cad du mdzes pa dang rang bzhin gyis rgyud rnam par dag pa'i phyir dge ba ste / kun du bzang po'i (P. po) spyod pa kun du dge ba mchog tu yid 'phrog pa mchog tu mdzes pa des 'di'i sku 'jam zhing mdangs sdug pa bla na med pa'i phyir sangs rgyas thams cad kyis mtshan 'Jam dpal zhes bya bar bstan to //**

~

である)ので、聖者である。顕わになった煩惱の粗い触を離れているので、マンジュ(妙)。〔福德と智慧の〕二資糧の吉祥を具えているので、シュリー(吉祥)。十六歳になった童子の年齢ほどに住しているので、童子。因〔である〕思惟・行動の円満二つに依って果〔である、自他の〕二利の円満である量の人士として誕生なさったので、なったもの、呼ぶからです。』

### 参考文献(五十音順)

足利惇氏校定『大無量寿経梵本』法蔵館、1965、岡田行弘「『法華経』妙音品の考察」(『奥田聖應先生頌寿記念インド学仏教学論集』、俊成出版社、2014)、同「『法華経』の付嘱と流通分 - 『首楞嚴三昧経』と比較して-」(『印度学仏教学研究』65-1、2016)、香川孝雄『無量寿経の諸本対照研究』永田文昌堂、1984、同『浄土教の成立史研究』山喜房仏書林、1993、鈴木健太「般若経における菩薩について」(『仏教文化』60、2022)、スダン・シャキャ「仏教文献に見られる文殊師利の解釈の展開について」(『密教学』45、2009)、同「文殊菩薩の信仰をめぐる」(『日本仏教学会年報』78、2013)、ツルティム・ケサン、藤仲孝司『チベット仏教 論理学・認識論の研究Ⅲ - ダルマキールティ著『量評釈』第1章「自己のための比量」とタルマリンチェン著『同釈論解脱道作明』第1章の和訳研究』人間文化研究機構・総合地球環境学研究所、2012、中御門敬教「文殊菩薩の浄土経典 - 蔵訳〈文殊師利仏土厳浄経〉第三函の和訳研究-」(『佛教大学仏教学部論集』98、2014a)、同「文殊菩薩の浄土経典 - 蔵訳〈文殊師利仏土厳浄経〉第四函の和訳研究(上)-」(『佛教大学仏教学会紀要』19、2014b)、同「インド浄土教の修道論の祖型 - 四輪との関係において-」(『印度学仏教学研究』65-2、2017)、同『普賢行と浄土思想』起心書房、2024、中村瑞隆『法華経上』春秋社、1999、中村元、早鳥鏡正、紀野一義訳注『浄土三部経(上)』ワイド版岩波文庫、2006、新作博明『チベット語訳阿弥陀経の諸本対照表』唯称寺仏教文化交流研究、2010、平川彰「大乘仏教の興起と文殊菩薩」(『印度学仏教学研究』18-2、1970)、同『初期大乘仏教の研究1』(「平川彰著作集」3)春秋社、1992、同「文殊師利法王子の意味と一生補処」(『印度哲学仏教学』10、1995)、藤田宏達『梵文無量寿経・梵文阿弥陀経』法蔵館、2011、同『新訂梵文和訳 無量寿経・阿弥陀経』法蔵館、2015、松濤誠廉、長尾

雅人、丹治昭義訳『法華経 I』（「大乘仏典」4）、中央公論社、1988、光川豊藝『文殊菩薩の研究』法蔵館、2024、山口益、櫻部建、森三樹三郎訳『無量寿経』（「大乘仏典」6）、中央公論社、1976、H. Kern and Bunyiu Nanjio, *Saddharmaṇḍarīka*, Bibliotheca Buddhica X.（名著普及会復刻、1977）、山本侍弘（弘史）「Ambararāja（文殊師利）の発菩提心偈」（『論集』32、2005）